

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

今回から、落語とはいったい何ぞや、ということ、みなさんにレクチャーしたいと思う。そんなことはしていらん、という人もいるだろうが、人間わがままは許されない時もある。全283回に及ぶ長講になるので、しっかりついてくるように(噓)。

ここで、一つ説明しておかねばならないのだが、この連載では噓やでたらめが頻繁に出てくる。私が(噓)と書いた部分は、文字通り、噓なのである。それをうっかり信用してよそへ行ってしゃべって恥をかいても、私の責任ではない。あなたの不注意なのである。気をつけて読むように。

さて、落語には上方落語と東京落語があるが、上方落語の方がえらいのである(噓)。ここで、まちがっても「上方」を「じょうほう」と読んではない。私は以前、東京のある工事現場の前を歩いていて「上方より落下物がある危険がありますので注意してください」と書かれた看板を見て、「どうして大阪からこんなところまで物が落ちてくるのだろう」と首をひねったことがある(噓)。

私は上方の人間なので、東京落語のことはほとんど知らない。東京にも落語ってあるのね、知らなかったわあ、という程度である。だから、この連載で、落語と言えば上方落語を指す。そ

こんとこよろしく。

さて。

あほなことばかり言うてる場合ではない。

本題に入らねばならない。

すなわち、「落語とSF」。

「落語とSFって何か関係あったっけ」「おまへん」

結論が出た。

では、さようなら。

というわけにはいかん。

落語とSFの間にある深い深い関係に迫る、というのが本稿の目的なのだ。

考えてみれば、SF作家と噺家との交流は古来、世間に知られるところで

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

ある（古来といっても縄文時代から、というわけではない。昭和40年代ぐらいかららしい）。

御大小松左京と人間国宝桂米朝師匠の若き日からの交遊は有名だし、堀晃、かんべむさしと米朝一門の若手との関係もファンの間ではよく知られている。とくに、かんべむさし、横田順彌、北野勇作らは落研の出身である。SF作家である彼らがSF研ではなく、落研の出身であるということは興味深い。

余談だが、ここで、「落研」は「落語研究会」の略なのだから、本来、ラクケンと呼ぶべきではないか、という指摘をしておきたい。なぜ、オチケンと

呼ぶのだろう。酪農研究会とまちがわれるからであろうか。

ついでに言うと、小沢健二のことをオザケンというが、越智健二という人がいたとしたら、きっとあだ名はオチケンだろう。萬田健二はマンケンだし、見須照健二はミステリケンだし、灰寝健二はハイネケンだし、ジャン・クロード・健二はジャンケンで、タフな健二はタフケンで、不亂健二はフランケン。そんな名字のやつはおらん？

ごもっとも。

ああ、話題がそれまくってしまった。もとに戻そう。何の話だっけ。

そうそう。

落研出身のSF作家のことを話そう

としていたのだ。

SFというのは、ある種、むちゃくちゃなものである。小説というのはだいたいむちゃくちゃなものだが、中でも、SFは、図抜けて一番といっているほどのむちゃくちゃさを誇っている。

普通の小説（というのも変な言い方だが）は、本来持っているむちゃくちゃさを、

「五十過ぎで妻子持ちの新聞記者のおっさんが同じく子供のいる超ベっぴんの女と不倫するというようなむちゃくちゃな話を書いてしまった。恥ずかしい。どうしよう。そうだ、まじめな小説であるふりをしよう」

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

などとひた隠しに隠そうとするが、SFの場合は隠そうにも隠すことができないのである。何しろあなた、タイムマシンに宇宙人にパラレルワールドに宇宙戦争に……。つまり、SFというのは「これはむちゃくちゃでっせ。嘘でっせ。大ぼらでっせ」と最初から断っているのに等しい。中にはまじめそうに見せかけているものもあるが、やはり基本は「バカ話」である。他のジャンルの小説にはジャンルの枠というかしがらみがあって、いくら大暴れしようと思ってもその枠の中でしかできない。ある程度、地に足がついていることを要求されるのだ。しかし！ SFの場合は、そもそも枠なん

かないのだ。作家の想像力の限りを尽くしてとことんむちゃくちゃをやることができるのだ。逆にいうとSFを標榜するということはその作家の想像力の限界が試されている、ということでもあるが……。

落語も同じだ。

漫才にしても喜劇にしても、複数の人間で行うということはどこか地に足がついている状態なわけだが、落語は一人で好き勝手にやればいいわけで、その演者個人の考えによってどこまでも果てしなくむちゃくちゃなことができる。内容的にも、狸がさいころに化けて博打をしたり、大黒さんが俵を持って踊りだしたり、蛸が芝居をした

り、川で釣り上げた骨の霊がおかまを掘りにきたり、とやりたい放題である（そういう奔放さ加減はやはり上方落語に顕著である。イキとかスイといった枷がないからであろう。ベタでコテコテではあるが、とにかく野放図で徹底的である）。

SFの持つ自由さ、でたらめさ、いい加減さ、奔放さ、無邪気さ……は、落語と共通しているのである。SFなどという「好き放題」の小説を書こうという人は、その資質の中に、地に足のついていないバカ話を愛する心が必要である。それが、SF作家に落研出身者が多い理由ではないだろうか。SFも落語も、「バカ話」という武器によっ

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

て時空間のしがらみを簡単に突破していくのである。カッコいい！

このあたりで、SF的な落語を紹介しておこう（えらそうに……）。

こういう時に必ず紹介されるのは「さくらんぼ」と「大津宿こぶ弁慶」というネタである。

前者は、さくらんぼを種ごと食べた男の頭から桜の木が生えてしまい、春になったら満開になり、その回りで花見の宴会がはじまって、どんちゃん騒ぎでうるさくてかなわん。怒った男は桜の木を引っこ抜いてしまうが、そのあとにできた大穴に雨水が溜まり、今度は舟遊びをしたり、泳いだり……。男はとうとうノイローゼになって、自

分の頭の池に身を投げた……。

東京では「あたま山」といって有名なネタだが、上方では絶えていたのを小佐田定雄が復活させた。桂雀々の得意ネタの一つ。

問題は、どうやって自分の頭の上にある池に飛び込んだかであるが、「縫ったキセルの袋を裏返す時のように」飛び込んでいく……という解釈があるらしい。しかし、そんな理屈をつけるより（この理屈はけっこう好きだけど）自分の頭の池に飛び込んで自殺する、というシュールさを味わうのが正しいSF道ではないだろうか（そんな道、どこにあったの？）。

後者は、源義経の家来だった武蔵坊

弁慶の大津絵を塗り込めてあった宿屋の壁土を食べた男が、にわかに発病し、その肩にこぶができる。そのうちに、目や鼻や口ができ、物を言いだした。弁慶の魂が宿ったのである。こぶ弁慶は、毎日、飯はたらふく食うわ酒は浴びるほど飲むわ、がーがー高いびきで眠るわ、起きたら大声で怒鳴るわ……始末に困った男は神信心をするがうまくいかない。ある時、大名行列を源平の戦いとまちがえて前に飛びだしたこぶ弁慶。男は大名に平謝りに謝ったが……。

いわゆる人面疽の話。なるほど、SFだ。

他にも、SFっぽいネタはいろいろ

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

あるが、私が数ある落語の中で一番SF的なネタだと思っている「二階ぞめき」を最後にご紹介しよう。

毎晩毎晩、遊廓に行く若旦那がいる。たまりかねて番頭が意見をすると、若旦那は「別に女のどこへ行きたいわけやない。色街の雰囲気味わいただけや」と言う。つまり、冷やかしがしたいのだ。番頭は親旦那と相談し、大金を投じて、家の二階に色街そっくりの街を造ってしまう。作り物だから店に遊女もいないし、人も歩いていないが、規模から何から細部までそっくりにできている。すっかり喜んではしまった若旦那は、二階で一人芝居をしながら気分を出す。そのうち、一

人で喧嘩をはじめ、大声で怒鳴りだしたので、一階にいる親旦那、「また、あほが何ぞはじめよった。定吉、二階へ上がって、とめてきなはれ」。丁稚が二階の遊廓へ行くと、若旦那は一人で自分の着物を引っ張ったりして、一人芝居に夢中になっている。丁稚が注意すると、若旦那、「しもたー。定吉、ここでわしに会ったこと、内緒にしといてや」

これは、まさにSFではないか。何しろ、自分の家の二階に色街を一つまるまる造ってしまうのである。江戸で言えば、吉原が全て商家の二階におさまっているわけだ。今でいうと、新宿歌舞伎町が丸ごと、というところか。

どうやってそういうことができたのか。二階が垂空間にでも通じているのか。それとも、ドロップ・スタッフか何かで圧縮をかけたのか……。そういった説明は一切ない（筒井康隆の「ヤマザキ」を彷彿とさせますな）。演者はただ「親旦那が大工の棟梁に造らせました」というような意味のことを一言言うだけだ。それでできてしまうのである。

小さな家の二階に街を一つ収容してしまうという規模の壮大さ、そして、それを何の説明もしないという凄さ。まさに、SFの真髓を言い当てたようなネタである。

東京ではポピュラーな噺だが、上方

RAKUGO THE FUTURE

1ST SESSION:

RAKUGO with SF

では長くやり手がいなかったのを、桂雀三郎が復活させたという。私は、月亭八天で聞いたことがある。

え？　ここまで読んできてもSFと落語のつながりがいまいちよくわからない？　どうも持っていく方に無理がある？　ギクッ。だから最初に言うてるでしょ。何の関係もおまへんって。結論はとうに出ているのだ。気をつけて読むように。

（文中の敬称は略させていただきました）